

言語分析のあり方

児 玉 徳 美

1 [現状] 今日の言語分析は文内構造にこだわり、閉塞状況にある

今日の言語分析は特定の語句や構文を対象にその意味や統語的用法を記述分析する研究が主流である。9割を越す研究のほとんどが文内の言語構造を対象とし、この2・30年類似のテーマが設定され、重箱の隅をつつくような議論が繰り返されている。情報化時代と呼ばれる今日、日常生活ではことばを中心とする情報が過剰といえるほどまき散らされているのに、言語分析は「科学」という名のもとにその対象や方法が小さく縮こまり、現実の言語活動を論ずる研究からほど遠い存在になっている(言語分析が閉塞状況に至った経緯や理由について詳しくは児玉 2013a:281-283, 児玉 2013c 参照)。確かに言語活動は文を繰り返したものであるが、文内の意味が繰り返されるわけではない。言語分析が閉塞状況の現状から脱却するためには、文を連ねた言説 (discourse) の意図や意味を論ずることができるよう、その対象や方法を拡大することが不可欠である。

日本で言語分析を専門とする研究領域に言語学会、英語学会、日本語文法学会、英語語法文法学会、語用論学会、社会言語科学会などがある。それぞれの機関誌や全国大会での最近の研究発表をみると、2割から6割の発表が特定の語句をタイトルに挙げ、語句の意味や用法を論じ、その他のものも構文や音声などの文内構造を対象にしている。その代表的なものとして言語学会は最新の全国大会シンポジウム(2013年11月)で「日本語研究とその可能性——音韻・レキシコン(語彙)・文法を中心に——」と題して新しい日本語研究のあり方を探っていた。しかし副題が示すように旧態依然として文内構造にこだわり、このシンポジウムから日本語研究に新しい可能性が開かれるとは期待できない。

特定の語句の意味や用法を記述説明する作業は一種の辞書づくりである。辞書づくりも広義の言語分析であるが、辞書づくりそのものは手順の訓練を受ければ学部学生にもできる作業である。しかし本来の言語研究は特定語句の意味・用法を記述したり OK, kick the bucket (= die) などの故事来歴を調べたりする辞書づくりではなく、言語構造や言語活動について一般化を求めるものである。辞書づくりに熱心な者は語彙の分析を通じて語の一般化を求めていると抗弁するかもしれない。その一般化は重箱の隅の周辺にすぎない。自然科学者がネズミのしっぽを研究して博士になる場合と事情が異なる。自然科学は自然現象の諸原理を確立しており、ネズミのしっぽもその諸原理の枠内に位置づけられる。しかし人文社会科学は人文社会現象を支配する諸原理をまだ見出していないため、重箱の片隅の分析は新しい原理の下ではいつひっくり返されても不思議でなく、いつ無意味なものになるかわからない。

今日の言語分析が文内構造にこだわり、閉塞状況にあるのは日本に限らず世界的な現象である。ただし詳しくみると、日本は世界に比べて一方で特定語句の意味用法を扱う分析が多く、他方で文を超える言説分析が少ない。その点、日本はより深刻な閉塞状況にあるといえる。先ず前者の問題か

らみてみよう。日本や中国では古くから「語法」が「文法」とほぼ同義に用いられ、語句の意味用法に基いて文構造が説明されてきた。特定語句の意味用法へのこだわりは日本・中国で特に強いのかもしれない。特定の語句を対象とする論文がすべて悪いわけではない。特定語句を論文のタイトルに出すことのない Jackendoff (1997) がかつて珍しく 'Twistin' the Night Away' のタイトルの下で英語の他の構文との異同を論じたことがある。ここで sleep the afternoon away, drink the night away, read the morning away などの「時間 + away」構文と pound the clay flat などの結果構文や whistle one's way などの way 構文との異同を論じたあと、タイトルの構文について sleep [twist] away を複合動詞として目的語を規定する語彙規則分析と V NP away 形式の動詞と目的語を規定する構文分析の2種の分析法を比較検討している。Jackendoff (1997) は特定語句の意味用法を出発点として標準的な語順と異なる英語構文の異同を論じている。その一般化は名人芸ともいえるほど見事なものであり、英語がなぜ多様な構文を有するかについての解釈は十分納得できる。しかしこの一般化はあくまでも英語固有の特徴を解釈するものであり、他言語にそのまま適用されるものではない。他言語との異同は改めて究明される必要がある。このような課題が残るのは、しょせん特定語句の「語法」を分析の出発点としていることによる。個別言語の意味用法獲得過程には偶然的で恣意的な要素が働いているためである。万人が共有する意味解釈過程には普遍性があるため、個別言語のどのような意味獲得過程も容易に理解習得されると考えるのはまちがいである。意味獲得過程は多様な意味解釈過程の一部にすぎず、そこには多くの恣意性が存在するためである〔意味解釈過程と意味獲得過程の違いについて詳しくは児玉 2013b 参照〕。日本で特定語句を分析対象とする者の多くは辞書づくりも言語研究の一種と錯覚しており、言語現象の一般化をどれほど意識しているのか疑わしい。

第2の問題である言説分析について考えてみよう。先に挙げた言語分析を専門とする研究領域のうち語用論と社会言語科学は比較的言外情報や言語と社会の関係を重視し言説分析も対象にしていると考えられるが、そこでの分析は言説標識 (discourse marker) やポライトネス、会話での話者交代 (turn-over) や話題転換の構造、異文化間コミュニケーションのあり方など、表現形式に直接かわるもので、言説の内容そのものを対象としたものではない。海外では言説の思いや主張そのものを対象とする言説分析の雑誌が *Discourse*, *Discourse & Society*, *Discourse & Communication* などいくつかみられる。日本ではそのような専門誌が皆無であり、言説分析が遅れている。そうした状況を反映してか、荻野 (2013) は最近出た『社会言語科学』の巻頭言で政治家の発言の特徴を分析することも言語社会科学の今後の夢の一つとして挙げている。数少ない政治言説の分析としては児玉 (2013a:246-252, 262-280) を参照されたい。言説分析がヨーロッパで起こり育っているのに対し、日本でなかなか育たないが、これも言語を論理や真実と一体とみなすロゴス観の強いヨーロッパと、依言真如より離言真如の言語観が強い日本の違いを反映しているのかもしれない。

2 [目標] 文内構造に限らず言語活動をも対象に一般化を求め、 諸言語の普遍性や多様性を究明する

言語分析が従来の文内構造だけでなく日常的に交わされる言語活動をも対象にすることを目標とするならば、対象範囲は語・文から言説にまで拡大されていく。言語表現の拡大は言語表現に直接

間接にかかわる領域をも新たな分析対象とすることになる。言説のスタイルともいえる個人や言語共同体固有の言説の秩序、話し手や聞き手が言語に何を託すかの言語観、言語表現に投影される対人関係・価値観・社会状況などの言外情報である。言語分析の拡大は必然的に分析対象に格段の拡大を伴うことになる。

言語分析は多様な要素を考慮しながら一般化を進めていくことになるが、一般化には多様な段階がある。前節でみた Jackendoff (1997) のような個別言語の個別構文についての一般化、他言語との異同を類型化する一般化、諸言語の共通性・普遍性や多様性を示す一般化である。言語表現に直接間接にかかわる価値観・社会状況・文化などの分析にも同じように、段階によって異なる一般化が適用され、一般性にも階層が存在することになる。

一般化を進めることにより諸言語の普遍性や多様性が明らかになる。ことばのもつ普遍性の多くは人間の生得的能力に由来し、ことばの多様性の多くは言語共同体の環境に由来する。ただし普遍性と生得性、あるいは多様性と後天性の結びつきは必ずしも直結するものではない。例えば普遍性の中には生得性に由来するものと、同じ地球上で生後に共通する経験に由来するものが混在しているためである（詳しくは児玉 2013a:185-187, 児玉 2013d 参照）。

2013年10月に他界した天野祐吉は世界でも類のない広告批評を長年展開した。天野は1979年に雑誌「広告批評」を創刊し、短い文章と映像からなる広告を論評するだけでなく、時代を読み解くエッセイや特集を掲載した。ことばは人と人をつなぐものであるという言語哲学の下で人の思いや世相を的確に描き、ことばを通して人や世の中をちゃんと見なさいと警告していた。言語分析の目標は天野の言語哲学にも共通し、分析対象を拡大することにより人間の姿に接近しようとするものである。

3 [分析対象] 意味と形式の関係を考察するが、意味が主役であり、形式はそれを支えるものである

20世紀は二度の言語革命を経験した。一つは Saussure (1916) であり、あと一つは Chomsky (1957) 後の生成文法である。両者は言語研究を「科学」と位置づけ、自然科学をモデルに厳正な方法論を求めた。そこでは言語研究の前提として一体何を分析対象とするかが問われてくる。現実の言語表現は音声は切れ目なく線条的に流れる連続体をなしている。しかし言語分析において実際に発話される言語の実質 (substance) をそのまま転写分析したのであれば100人100通りの音声であり、共通項を見出すことが不可能である。そこで言語分析が対象とする言語は具体的な実質ではなく、万人が共有する言語知識であるとして、理想化・抽象化された形相 (form) が仮定された。形相としての言語は連続体をなすものではなく、切れ目が内在するものとして分節・範疇化される (英語の form (形式) はしばしば意味に対立するものとして音声や外見上識別できる文字や形態素・語順などの統語的特徴を指すことが多いが、形相は形式と違った音声 (形態や統語的特徴) と意味の両面に属する言語知識を指すことに注意。詳しくは児玉 2013a:119 参照)。この形相を基準に言語はラングとパロール、あるいは言語知識と言語運用に大別され、科学としての言語学が対象とするものは前者に限定されることになった。

実質でなく形相を言語分析の対象とする視点からみると、言語の音声や形態からなる形式は客観

的で捉えやすいが、意味は不可視的であいまいである。結果的に Saussure (1916) や Chomsky (1957) 後の生成文法においては形式が言語の主役であるかのように形式を扱う統語論や形態論は進展したが、意味を扱う分析には大きな進展がみられなかった。分析の対象が主として文内構造に限られたのも、形式へのこだわりから意味を軽んじた結果といえる。

言語構造を分析対象とする言語理論がその分析領域を限定しているのと対照的に、同じ言語を対象にしながら言語を駆使し思考する人間の本性に迫ろうとするものに言語論がある。言語論はときに言語思想とも呼ばれる。言語と思想・文化・社会特質・認識などの関係を明らかにしようとしている。前者の言語理論が形式を重視し、ラングや言語知識を対象にするのに対して、後者の言語論は意味を重視し、パロールや言語運用に属する言説を対象としている。20世紀に言語理論が「科学」として専門化し、分析対象を狭めていくにつれて言語理論と言語論の間はますます遠くなり両者の交流は少なくなっていった。そうした状況に対して児玉 (1998) は私にとって言語理論と言語論の統合を図ろうとした最初の試みであった。そこでは言語理論と言語論はそれぞれの分析対象を拡大し、いかにして両者の接点を見出すかを探っている。

言語理論と言語論の接点を探る兆しは20世紀後期にみられる。1970年代になると Saussure や生成文法で俊別されるラングとパロール、言語知識と言語運用の二分法を否定する言語理論が生まれた。認知言語学・関連性理論・体系文法などである。ここでは意味にも焦点を当て、言語と経験や現実世界との関係を探ろうとしている (詳しくは児玉 2013b, c 参照)。しかし意味に焦点を当て文連鎖をも対象にしているとはいえ、上記の言語理論の多くは隣接する2・3の文中心の分析にとどまっている。そのような限界はあるが、そこには今後言説分析へ発展する可能性が秘められている。

確かに言語は形式と意味が結合したものである。しかし形式と意味の間には大きな違いがある。存在する形式は有限であるが、意味は無限に広がっている。言語は、本来、意味を伝えるために形式があり、形式を伝えるために意味があるのではない。言語発生的にも言語実態からみても意味が主役である。この言語を駆使できるのは人間固有の特質であり、意味の正体を明らかにすることは人文社会現象の謎の鍵を提供することにもなる。

4 [意味領域] 言われていることだけでなく、 含意・推意・隠蔽されていることを究明する

ことばを介して語られることばの意味は語句や文、あるいは文を超える言説の表面的な意味に限らない。話し手が語る思いや意図・主張はそれが単独で生まれるわけではない。語り手がどのような社会に育ちどのような時代に生きているかにより、あるいは何をどのような場面で誰に向かって語るかによっても違って来る。このように考えると、ことばの意味は単に話し手の思い込みや話し手が創造的に生み出した意図や主張であると言い切れない面もある。話し手が気づかないところで発話場面から聞き手側に生まれる意味もあり、社会や時代の要請・価値観・利害などによってつくられる意味もある。さらに言語活動の背後では、話し手は語りたいことだけを語り語りたくないことに口を閉ざし、聞き手は聞きたいことだけを聞き聞きたくないことに耳をふさぐ性癖をもつため、人が語ったり聞くことを意識的・無意識的に避ける「不作為の作為」や「沈黙の陰謀」にも意味がある (「不作為の作為」や「沈黙の陰謀」について詳しくは児玉 2013a:169, 280 参照)。

言語分析が対象とする意味領域は語句・文から言説に至る、言語表現の明示的な意味に限らない。言語表現から生み出される含意や推意、あるいは「沈黙の陰謀」により隠蔽されている意味なども含まれる。明示的な意味—含意—推意—隠蔽されている意味のうち後になるほど明示的な意味から遠ざかり、人による解釈に多くの違いが生まれてくる。これは連続体をなす言語表現の明示性に段階的な違いがあることの反映であるといえるが、それぞれの意味領域に明確な境界があるわけではない。各言語理論はどのような意味領域を設定するかに敏感である。どの意味領域を分析対象とするかによって言語理論における意味の位置づけに違いをもたらすためである。

例えば Grice (1975) と関連性理論は意味を「言われていること / 表意」と「推意」に大別しているが、「言われていること」と「表意」はその領域が異なり、「推意」にも違いがある。明示的な意味・含意・推意・隠蔽されている意味といえ、すぐにそれらの意味領域は何かと疑問が出るかもしれない。ここでは当面次のように考える。

- (1) a. 涼しい vs cool
 b. 妻、家内、女房、おかみさん vs wife
 c. *正直に太郎はうそつきだ。 vs Honestly Taroo is a liar.
 d. 息子が家賃を払うよう約束します。 vs * I promise you that my son will pay the rent.
- (2) a. みかん 1 キロ 500 円
 b. 善処します。
- (3) A: これから映画を見に行こう。
 B: ああ、喜んで。
 C: 明日試験があるんだ。
 D: そうだな。サッカーの試合も見たいんだけど・・・

(1a) の日英語は暑くも寒くもない状態を示し、明示的な意味、つまり個別言語の形式が表す文字通りの意味は同じであるが、日本語の「涼しい」には「快い温度の状態」が含意されているが、英語の cool にはその含意はない。その結果、cool には「冷静な」や「冷淡な」などの意味も派生しているが、そのような意味は日本語の「涼しい」にはない。日本語は一般に情意性の強い言語といわれ、(1b) の語の明示的な意味は同じであるが、wife に対して日本語には多様な類義語が存在し、それぞれに感情的な含意の違いがみられる（詳しくは兎玉 2013d 参照）。言語表現の文体に応じて含意の異なる語が選ばれる。(1c) の英語の honestly は明示的な意味として speak などの動詞を修飾する語副詞と、honestly speaking とほぼ同義の文副詞の 2 通りの意味を有するのに対し、日本語の「正直に」は文副詞の意味に欠けるため日英語で適格性が異なる。(1a, b) の日英語は含意が異なるのに対し、(1c) は明示的な意味が異なる。(1d) の「約束する」や promise の明示的な意味はともに話し手 (I) が自分の今後のふるまいについて約束するものであるが、日本語では身内の「息子」も話し手の「縄張り」に属することができ適格である。しかし英語では親子は別人格であり表現として不適格となる。ここでの含意の違いは文化の違いを反映している。含意は感情や敬語にみられる発話態度や価値観・言語観・文化など、多様な言外の意味に由来し、明示的な意味と結合している。店頭で (2a) の値札を前にしたとき、百貨店なら明示されている代金で買い、屋台では値引きを要求して 500 円以下で買えるかもしれないと推意される。(2b) の明示的な意味は 1 つであるが、誰の発言であるかに

より「善処します」の約束が守られるか否かについての推意が異なる。(3)のAに対するB-Dの返答でBは映画を見に行くことに賛成、Cは反対、Dは賛成か反対か判断しにくいことが推意される。映画を見に行くか否かについてB, Cの場合賛否が明確で多くの人的一致する「強い推意」となり、Dの場合賛否の解釈が人によって大きく分かれる「弱い推意」とみなされる。「隠蔽されている意味」とは先ほど述べた通り沈黙の陰謀などによって隠されている意味である。

含意と推意を境にしてその前と後で意味の解釈に違いがみられる。明示的な意味と含意は個別言語で語られる言語表現の意味を対象にしたものであり、両者の意味を表す語句の選択や結合関係に論理一貫性があるか否かが問われ、文法に合致するか否かにより表現の(不)適格性が決定される。一方、推意と隠蔽されている意味は語られた言語表現が後に与える効果として推論される意味を対象にしたものであり、話し手の意図や表現の信頼性が問われ、表現が真実であるか虚偽であるかにより表現の(不)適格性が決定される。(不)的確性はあらゆる表現に適用されるが、前者の明示的な意味や含意の場合、表現そのものが(不)適格であり、後者の推意や隠蔽されている意味の場合、表現が伝える内容が(不)適格である。両者を区別して前者を(非)文法的な表現、後者を(不)適切な表現と呼ぶこともできる。主として(非)文法的は文に、(不)適切は言説に適用されるが、文と言説の間には文脈情報の範囲にこそ違いがあるが、意味上の文脈情報そのものにそれほどの違いが存在するわけではない(詳しくは児玉 2013c 参照)。意味分析としては言外情報を含めて意味領域を細かく規定することも大事であるが、より重要なことは分析対象とする意味領域をいかに拡大するかにある。

Saussure (1916) や生成文法が主に明示的な意味を対象にするのに対して、1970年代よりラング・パロールの二分法を否定した認知言語学・関連性理論・体系文法は意味領域を一部の含意や推意にまで拡大している。しかし人の解釈が大きく分かれる「弱い含意・推意」や隠蔽されている意味は分析対象に含まれていない。児玉 (2013a:284) が指摘しているように、認知言語学・関連性理論・体系文法の多くがミクロ語用論または語彙語用論に属し、すべての意味領域を扱っていないのに対し、マクロ語用論または言説語用論とも呼ばれる言説分析は3節で考察した言語理論と言語論の両方を包含し、意味領域全体を対象としている。後者のマクロ語用論は例えば批判的言説分析(critical discourse analysis) や1節で紹介した言説分析の専門誌に掲載された論文などにみられる。言語分析が意味の全体像を明らかにするためには、ミクロ語用論のように意味領域を恣意的に限定するのではなく、マクロ語用論のように意味領域全体に拡大すべきであろう。

言説は含意・推意や隠蔽されている意味などにおいて人による解釈が分かれ、いずれとも判断しにくい場合がある(あいまいさの種類や言語観・文化によるあいまいさの許容度の違いについては児玉 2013d 参照)。状況によっては不確かな解釈や判断をあいまいなまま残しておくことがある。プライバシーや私的心情の機微などにかかわる場合である。しかし状況によって特に事故や不正にかかわる言説は今後再発を防ぐためにもあいまいさをあいまいなまま残しておくことは許されない。例えば安倍首相は2013年9月にIOC(国際オリンピック委員会)総会で行なったオリンピックの東京都への招致演説で「状況は完全にコントロールされており、汚染水は湾内0.3平方キロメートル内にブロックされている」と述べ安全性を強調したが、帰国後の10月、その発言は国会で実態と違うのではないかと追及されるや表現を次々と変え、政府答弁は迷走した。安倍首相が汚染水を阻止すると国際的に公約したとき、その公約はすでに破られていたのかもしれない。10月末にはCIA(米中央情報局)のスノーデン元職員の提供した内部情報をもとに米国が世界の指導者35人の電話を盗聴していたとこ

が明らかになり、その真偽に対して米国政府は「どの国もやっていることを米国もやっているだけで、米国の情報活動の詳細を明らかにすることはできない」とことばを濁し、多くの国の不信を招いた。11月には日本のホテルや百貨店の多くの食堂が食材を偽装していたことが判明し、当事者は当初「偽装したものではなく「誤表示」したもので意図的なものではなかった」と弁解した。「誤表示」であるならば「誤って」使用した食材の中には「誤って」表示した食材より高価なものがあったとしてもよいはずであるが、不思議に実際に使用された食材は「誤表示」された食材よりすべて安価なものであり、経済優先のコスト主義の下で意図的に客を呼ぶための工作であった。

いずれの発言にも自分に都合の悪いことは隠そうとする意図がうかがえる。正に沈黙の陰謀の具体例であるが、それを擁護する根拠として外交は国益を守り、商売は営業利益を求めるのが「常識」であることを強調する考えもある。このような発言に対して賛否両論があり、人の意見が分かれるところでもある。ここには話し手や聞き手の価値観や社会状況の認識などがかかわってくる。言語分析としては不確かな判断解釈をより確かな判断解釈とするために従来の分析以上に広範な言外情報を活用することにもなる。言語分析が言説を含む言語表現に対してより確かな解釈を得るため、次節の末尾でもみるように、あいまいさを少なくしようとする。その過程には大きく2つの意義がある。一つは言語の主役である意味を明らかにすることにより言語活動の全体像に迫ることができる点にあり、あと一つは状況によってあいまいさや不正を排し、語り手の発言に責任をもたせ、現実の言語活動を活性化することができる点にある。

5 [コーパス] 量的分析だけでなく質的分析も進める

IT機器の進歩に伴い、大量のコーパス（言語資料）の収集や検索が容易になり、今日では多くの国で母語を対象にしたコーパス言語学（corpus linguistics）が組織されている。そこでは話しことばの文字化も進み、言語活動全体の資料が蓄積保存されている。コーパスは各時代の言語実態の記録であり、将来にわたって貴重な資料となるであろう。

問題はコーパスをいかに利用するかである。これまでの研究は主として語句の使用頻度や結合頻度に基づいた量的分析であり、ジャンルによる表現スタイルの違い・語彙・コロケーション・構文などの研究に寄与してきた。その成果は辞書づくりなどに役立っている。しかし成果は文内構造に限られ、文を超える言説などには無力である。今後コーパス研究が発展して言説なども扱うためには質的分析が必要であるといわれているが、その道筋は決して容易でない。コーパスの中の何を基準に質的分析を進めるか、枠組みが確立していないためである。これはコーパス研究に固有のものではなく、言説分析にも共通する悩みである。その枠組みは言説分析とともに今後確立していく必要がある。

質的分析のあり方を考えてみよう。日本では2014年4月から消費税が5%から8%に上がることが決定され、2016年からは10%になると予定されている。また前節でみたように安倍首相がIOC総会で行なった汚染水についての国際的公約の評価については意見が分かれている。二つの問題についてアンケートで国民に賛否を求めた場合、量的分析としては数字がすぐに出てくる。さらにこの数字を補強するために賛否の理由などを詳しく問うことができる。しかしこれらの数字には相反する意見もあり、数字を並べるだけでは意見集約として問題が解決したことになる。これらの

数字はアンケートの結果にすぎない。重要なことは賛否の理由を支える背景的要因である。質的分析としては増税案や国際的公約の賛否の裏づけをより確かなものとする必要がある。そのためには実態の確認や経済・外交政策、価値観、社会状況などの背景的要素を加味して総合的に判断することになる。その際、多様な背景的要素のうち何を重視するかが政策決定者の判断に影響を与え、決定者としてそれなりの責任を伴うことになる。質的分析としては量的分析を利用しながらその判断の適否を考察していくことになる。

6 [言外情報] 価値観・社会状況・文化などとの関係を探る

日常の言語活動は言語表現と言外〔文脈〕情報が一体となって主役と脇役の区別もなく新しい世界をつくっている。ここではことばとともに、言外の要素である知識・価値観・社会の慣習や経験、さらには意図・利害・論理・推論・連想などの思考過程が入り乱れている。2節や4節でも指摘したように、言語表現が語・文・言説と拡大するにつれて言外情報も拡大していく。

同じ言外情報は言語活動を含む人文社会現象を生み出しているものでもある。したがって言語活動は人間の行動や文化とも関係してくる（詳しくは児玉 2013e 参照）。言外情報の働きは領域によって異なり、言語活動と行動と文化の三者が1対1で対応するわけではないが、三者の間には密接なつながりがある。例えば普遍性と多様性は、2節でもみたように部分的に生得性と後天性に関連し、言語だけでなく行動や文化の現象にも適用される。個人や社会の行動・習慣や文化においても普遍的なものから多様性に至る現象が連続体をなして存在するはずである。またロゴス観と離言真如の言語観の違いは、1節の末尾でみたように言語分析や言語表現に違いをもたらすだけではない。児玉 (2013d) が指摘しているように人間のあらゆる言動において論理をいかに重視するか、あいまいさをどれほど称揚・許容するかなどの点で大きな違いをもたらしている。

言外情報が人文社会現象を生み出すうえで大きな役割を果たしているものとして価値観がある。第二次大戦後、社会構造の変化・科学技術の進歩・貧富の拡大・市民意識の高揚などにより社会が多様に分岐し、問題領域によって異なる多様な価値観やサブカルチャーが生まれてきた。その結果、すべてを律し、すべての価値観やサブカルチャーを統合支配していたかつてのイデオロギーは崩壊していった（価値観と社会状況の関係について詳しくは児玉 2013a:108 参照）。こうした状況の変化は人々の行動にも現われる。例えば政治や既存の社会体制への批判や反対を表明するデモ参加者は、30年ほど前までは学生や労働組合に組織された者が中心であった。しかし2013年12月に特定秘密保護法案への反対デモは日本各地でみられたが、その参加者の中心は、組織されていない個人の一般市民であった。価値観の多様性に応じて人々の行動も変化している。特に若者の間で政治離れが広がっている。時代の流れの中で多様な価値観が今後どのような方向に向かい、どのように収斂されるかは定かでない。今日の言語活動は多様な価値観が複雑に交錯しながら展開している。それだけに言語分析においては語り手がどのような価値観の下で語っているかを把握することが不可欠であり、特定の意図や価値観の下で表現の背後に隠されている沈黙の陰謀を見抜くことが従来に増して重要になっている。言語表現に現れる話し手の価値観や社会認識を論じることは分析者自身の価値観や世界観が問われていることにもなる。

価値観が多様に分かれている今日、価値観を統一することは不可能ともいえる。それだけに逆説

ながら「多様な価値観の共存」が必要になってくる。重要なことは同じ価値観が共有され、逆に多様な価値観が容認される際の条件を明らかにすることである。例えば今日の政党政治は民意から離れたところで行われ有権者の不信を招いているが、その最大の原因は旧態依然の党議拘束に従って数の力で政策を強行採決していることにある。価値観が多様化している今日、党内に異論が多い場合、問題によっては党議拘束をはずして賛否を個人の判断にゆだねることも考えられる。そうしてはじめて自立した政治家も生まれてくる。価値観は個人によって異なり、必ずしも常に均一に働くものではない。価値観は重要さにおいて本来階層をなしており、価値観の共有か共存かの違いは、経済・政治・文学などの領域、個人間や国家間の関係、社会状況などによって異なるともいえる。価値観の議論では情報をどのように共有するかという問題もからみ、その解決は複雑化した世界において21世紀最大の課題であるといえよう。

階層性は価値観だけに見られるものではなく、他の言外情報すべてに見られるものでもある。階層をなす個々の言外情報は領域によってそれぞれ異なる役割を果たしながら言語表現を含む人文社会現象を生み出している。人文社会現象の謎を究明するためには、重要さにおいて異なる各言外情報の階層性を明らかにしながら、交錯している各情報の関連を解明することになる。人文社会現象の中では言外情報が言語表現に比較的色彩濃く現れるため、言語分析は人文社会科学のモデルになる資格を十分備えている。

7 [全体と部分の関係] トップダウン式分析とボトムアップ式分析を統合する

この世の物はすべて他の物との関係で成立している。これは言語表現においても他の人文社会現象においても同様である。表現を構成する要素は一方ではその上位範疇の特徴を有し、上位範疇はさらに高次の上位範疇にその部分として属する。他方、下位範疇に属する要素はその下位範疇にとっては全体をなす上位範疇となる。高次の全体から低次の部分に至る階層性を究明し、全体と部分の関係を明らかにすることが言語分析の課題となる。

具体的な分析方法として全体から部分(細部)に至るトップダウン式分析と部分から全体に向かうボトムアップ式分析を統合することである。これは全体論と還元論の統合ともいえる。人間の言動を誘引する人間の生得的能力・価値観・文化などがかわる一般的な原理から出発して、そこから派生する下位階層の具体的な言語表現を説明するとともに、逆に具体的な言語表現から出発して一般化を求めて上位階層との関係を調べる。具体的な分析例としては素案ながら兎玉(2013a:168-172)を参照されたい。

トップダウン式方式とボトムアップ式方式を統合するとはいえ、全体と部分をなす階層は領域によって異なり、両者を統合することは決して容易ではない。言語表現だけでなく言外情報そのものが領域によって階層が異なり、異なる階層の特徴を調整しながら一般化を求めるためである。人文社会科学が人文社会現象を支配する諸原理を探るために苦労しているのも、異なる階層間に一般的な原理を見出すことの困難さによる。言語分析としてはトップダウン式分析とボトムアップ式分析が接する領域で齟齬がなくなった段階で作業は終了することになる。

本論は私が最近論じたことをまとめたものである。重複することを避け、関連する部分は引用文

献として拙論を挙げたので、詳しくは該当箇所を参照されたい。

実際の言語分析は必ずしも常に言語（活動）を支配する一般的原理を論じるものではなくボトムアップ式分析として細部の言語現象を論じることも多い。しかし今後言語（活動）の全体像に迫るためには、どのような言語（活動）の領域を考察するにしても、本論の各節で指摘した7点を考慮し、7点のどこに位置するかを常に自覚しておく必要がある。言語（活動）の全体像に近づくことは人文社会現象を支える諸原理に接近することにもなる。

引用文献

Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. Mouton.

Grice, H.P. 1975. 'Logic and Conversation.' *Syntax and Semantics 3: Speech Act*, ed. by P.C.Coke and J.L. Morgan, 41-58. Academic Press.

Jackendoff, R. 1997. 'Twistin' the Night Away.' *Language* 73:534-559.

児玉徳美. 1998.『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの——』くろしお出版.

児玉徳美. 2013a.『ことばと意味』開拓社.

児玉徳美. 2013b.「言語の本質：普遍性と多様性」『立命館文学』632:78-89.

児玉徳美. 2013c.「文と言説」『英語語法文法研究』（20号に掲載予定）.

児玉徳美. 2013d.「あいまいさについて」『りべるたす』（25号に掲載予定）.

児玉徳美. 2013e.「日本語の用字用語」『立命館文学』（633号に掲載予定）.

荻野鋼男. 2013.「巻頭言 コミュニケーション問題と社会言語科学」『社会言語科学』15.2:1-2.

Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Payot.

(本学名誉教授)